

日本染織文化の再発見と継承をねらいとした 被服学習を支援する内外資料収集と教材開発

柴 静 子
(2014年10月2日受理)

The Investigation and Collection of Exported Robes and Development of Teaching Materials
for Senior High School Clothing Learning

Shizuko Shiba

Abstract: The first purpose of this study is to collect the real thing of clothes exported to Europe and America for the Meiji period. The silk which became the lining of export clothes was so thin. I measured how much thinness it was with the apparatus which measured thickness of clothes. The thickness of the lining which was attached for a Kimonos embroidered flowers was 0.044mm. The next purpose of this study was to develop the teaching materials to discover Japan of the dyeing and weaving. I made a worksheet to use with a class to understand the history of Japanese clothing by a small piece of clothes. As the teaching materials for classes, I made a lucky charm by the silk of Japanese and Liberty's cotton. The biggest purpose of this class was to understand mind of the manufacturing of the people who made export clothes in the Meiji era.

Key words: country of dyed and woven textiles, dressing gown, clothing learning
キーワード：染織の日本、ドレッシング・ガウン、被服学習

はじめに

本学には、学部と附属学校間において児童・生徒を対象とした調査や授業実践を伴った研究を推進するための共同研究機構がつくられており、年間約30のプロジェクト・チームが授業理論と実践を往還するアクティブな研究に取り組んでいる。

筆者および附属中・高等学校、附属福山中・高等学校の家庭科教員から構成されたチームは、平成25年度には高等学校「家庭基礎」の衣生活分野において、「海を渡ったキモノから『染織の日本』を再発見する衣生活学習」をテーマとした授業のデザイン研究を行い、「広島大学学部・附属学校共同研究紀要」にまとめた¹⁾。

この研究は、明治期から大正前期に欧米に向けて輸出されたキモノ風室内着の実物観察、各種の映像視聴、図録による調べ活動等を通して、染織日本の「ものづくりの精神」を理解させるとともに、欧米を魅了した

キモノのもつ「ちから」を歴史的、文化的な視点から発見させることで、日本人としての誇りをもつことに繋がる学習の開発を意図したものであった。身近に存在していながら、正体がよくつかめない着物のベールをはがして、高等学校家庭科の教育内容として取り上げようとした実験的な試みは、平成25年11月から12月にかけて、附属福山高等学校の1年生2クラスを対象にして高橋美与子教諭によって実践された。

ところで、この研究を推進するためには、少なくとも次のような大学側からの支援が必要とされた。(1) 明治期のキモノ風室内着の基礎となった幕末の「打掛の写真」、「打掛裂貼り込みパネル」、「類似の打掛の実物」という三者間の「見え方」に関する調査を生徒に実施し、写真が実物衣装や裂貼り込みパネルの代替となり得るかどうか、という点について検討する。(2) 当研究室で所有している国内外から収集した時代衣装について、歴史的・文化的な視点から理解するための

知識を確かなものにする、そして(3)これに基づいて『染織の日本』の再発見を目的とした学習のまとめとなる実物教材見本をつくる、という3点であった。

(2)に関する研究の第一報は、既に本学の教育学研究科紀要に掲載した²⁾ところであり、実際に得られた知見の多くが25年度の附属学校との共同研究に反映された。しかし、その後、教材として意義をもつ実物衣装の収集がさらに進んだこと、および先の研究の過程で導き出された疑問点のいくつかが継続した追求によって明らかになったこと、そして第3の課題であった「学習のまとめにふさわしい、布を用いた教材」をいくつか開発したことから、授業実践の確かな指針となる資料を提供したいと考え、本稿の執筆に至った。

なお、課題の1点目であった「(1)写真が実物衣装や裂貼り込みパネルの代替となり得るかどうか」という点については、附属高校および附属福山高校の1年生計146人を対象として「打掛の写真」・「打掛裂のパネル」・「類似の打掛実物」の三者間の「見え方」に関する調査を実施した。調査時期は2013年11-12月であった。

質問項目は「布の模様判別(5項目)」、「生地の種類(1項目)」、「布の雰囲気(3項目)」、「伝統の技(3項目)」、「着用のイメージ(2項目)」、「着物のもつ意味の理解と予測(4項目)」、「着物探究への意欲(2項目)」という計20であった。対象物をよく観察して、「強く肯定する」場合は5、「肯定する」には4、「普通」には3、「否定する」には2、「強く否定する」には1を与えるように指示した。

手順1として、公益財団法人鍋島報効会徴古館から使用を許可された、同館所蔵の「白紬地紗綾型花卉模様打掛」の全体写真(A4版カラー)と袖部分の拡大写真(A4版カラー)を背中合わせにクリアファイルに入れて、質問紙(1)とともに調査対象者各自に配布し、観察させた。写真はアンケートと一緒に回収した。

手順2は、質問紙(2)とともに写真に類似している打掛の実物裂のパネルを2、3人に1枚あたりに配布し、観察させた。パネルは質問紙と一緒に回収した。

手順3は、衣紋掛にかけ、その上を布で覆っていた打掛の実物(アメリカから収集)について、まず布を取り、近くに集まってくるように指示をして、至近距離で観察させ、質問紙(3)に回答させて回収した。

以上の調査から、次の5点が明らかになった。(1)「模様や刺繍」については、実物の打掛、裂、写真の順でよく判別できた。(2)豪華な感じを受けるのは、実物、裂、写真の順であった。(3)日本の着物の伝統と文化を感じるのも、実物、裂、写真の順であり、「着物職

人の心意気と技に感服する」ということについても同じ傾向が見られた。(4)既存の知識だけでは正体が分からない着物について、「調べ活動したい」という思いや、「欧米に与えた影響について知りたい」という気持ちは、打掛、裂、写真、の順に強くもたれていた。

このように、カラーでA4版という大きさをもつ美しい打掛の写真でさえ、実際の裂や実物から得る情報量とインパクトには及ばないことが明らかになった。それとともに新たな課題として浮上してきたのが、実物衣装を観察させる際に、形や模様・刺繍の美しさや技法といった外観や、生地を持つ手触り感を視点とするというこれまでの考え方に加えて、「計量・計測」という方法を取り入れることの意義についてである。各衣装の重量や使用されている生地の厚みを測定する、衣装の仕上がり寸法の計測をする、さらにはパターンの形状を導き出させることなどを通して、対象物をより科学的に理解させ、身近に感じさせることができるのではないか、と思われた。

以上の考えに基づいて、本稿では、最初に、新たに収集した明治期の輸出用ドレス・ガウン、イブニング・コート、キモノ風室内着を提示するとともに、既に紹介した衣装ではあるが、それらのもつ重要な意味が明確にされていなかったものを取り上げて、再考察を行う。次に本研究室が所有する実物衣装のうち主なものを取り上げて、上述した計測やパターン作図を実施する。加えて、学習の総まとめとなる「布を用いた製作品」の実例を示す。この3つにより、日本染織文化の再発見と継承をねらいとした被服学習を支援する諸資料の意義が明示され、授業実践のための確かな指針として機能すると考えた。

I. 欧米から収集した明治期の輸出用ガウン類

先行研究から、日本が開国し、近代化した欧米と市場を競わねばならなかった時代に、「椎野正兵衛商店(S.SHOBEY)」、「飯田高島屋」、「千總」などからシルク地に絹糸で刺繍が施された室内着や絹製品が輸出され、その素材や装飾の技、また和魂洋才のデザインがかの地の人々を魅了し、多くの外貨を得たことが明らかになっている。これは、まさしく1世紀後の私どもが、日本の絹とキモノのちからを具体的にそして驚嘆をもって認識できる出来事であったといえる。

それでは、明治の染織の秀逸性を欧米に認めさせた室内着とは、一体どのようなものであったのだろうか。図録『モードのジャポニスム 東京展』(京都服飾文化研究財団1996)には、同研究所が収集・所蔵してい

る明治期の輸出用室内着やイヴニング・コートが「写真」と説明の形で取り上げられている³⁾。驚くべきことだが、これらに類似した衣装は1世紀を経た現在でも欧米のアンティーク市場に出されることがあり、比較的安価に入手することができる場合がある。日本の絹織物の優れた耐久性はもとより、所有者が大切に扱ってきたことが劣化や破損が少なく現在まで残っている要因であると思われる。

当研究室が入手した明治・大正前期の輸出用室内着やイヴニング・コート類は計20点であり、大きくは次の3つのパターンに分けることができる。1つは、椎野正兵衛商店などが幕末から明治初期に製作し、輸出していたピエモンテーズ風ブリーツをもつドレッシング・ガウンとキルティング（刺し子）が特徴であるドレッシング・ガウンである（2点）。2つめは明治中期に千總や飯田高島屋などが製作し、輸出したイヴニング・コート（マンダリン・コート）である（8点）。3つめは、同じく千總や飯田高島屋が明治後期に輸出したキモノ風室内着もしくはそれに類似したものである（10点）。これらの多くはアメリカから収集したが、イギリスからの収集品もある。

実物を観察すると、これらの衣装の大多数は、絹の表地、中綿、絹の裏地という3層になっており、表地には絹の撚糸を用いて日本的なモチーフの刺繍が施されている。裏地にはごく薄い絹が使用されているため、表地は殆ど劣化していないのに裏地が相当破損されているものや、破損された裏地をとってしまっただわりのやや厚手の絹地をつけたものもある。刺繍については、日本刺繍の特徴である肉入繡の技法が多用され、絹地に立体感を与えている。モチーフ、刺繍部分の面積とボリューム、手業の巧緻度等については、各衣装で差が見られる。

次に本研究室の所蔵品のうち、「染織日本の伝統と文化」に関する学習を支援する可能性が高い新着衣装及び自体のもつ意味が明確になった衣装を写真で示し、解説をする。図1-1から図4-4を参照されたい。

II. 「染織日本の伝統と文化」の学習を支援する実物衣装

(1) 幕末の刺繍小袖と打掛

図1の写真①は、幕末の武家の小袖を上下2つに分けて、それぞれをトッパー・ジャケット(上半分)とチュニック(下半分)として利用しようとしたことが窺われるもので、アメリカから入手した。この衣装の元である小袖は、白の絹縮緬に空目、瑞雲、藤や日本的な

花々を一面に刺繍したものであり、生地は異なるが、模様はメトロポリタン美術館所蔵の「白縮子地藤花東雲模様打掛」⁴⁾と類似している。図1の②は、ルノアールが1882年に描いた「エリオ夫人」であるが、①は夫人が着用しているガウンに極めて似ているため、モードのジャポニスムの発祥に関する学習においてインパクトがある衣装として活用できる。

図1の④は、国内で入手した浅葱色縮緬地の打掛である。文様は、浦野理一著『染繡小袖』に収録されている「藍ねずみ縮緬地御所解文様振袖」に類似している⁵⁾。この模様は欧米で最も好まれたものの一つであり、例えばビクトリア・アルバート博物館には、図1の⑤に示したように、類似の色と模様をもつ縮緬の着物が収蔵されている⁶⁾。日本の着物が欧米を魅了した証拠として利用することができる。

(2) 「椎野正兵衛商店 (S.SHOBEBY)」で製作・輸出されたことが推測できるドレッシング・ガウン

図2-1と図2-2の写真①～⑨に、3種のキルティングのガウンを示した。

①～⑤は同一のものであり、1880年頃の日本製ガウンである。アメリカから入手した。地色は臙脂色で、厚手の絹（精好）にベージュやグレーの淡い色調の絹糸を使用して、草花や鳥が豪華に刺繍されている。前開きの7カ所には釈迦むすび紐が付けられている。裏地には薄手の平絹が用いられ、中綿（絹）と一緒にキルティングが施されている。後身頃にはピエモンテーズ風ブリーツが付けられており、ボリュームのあるスカートの上から羽織ることが可能な仕様になっている。このブリーツの背中部分にも衣装前面と同様の草花が刺繍され、華やかさを出している。

19世紀末に大量に輸出されたこのタイプのガウンは、ヨコハマ・ローブと呼ばれ、欧米から歓迎された。横浜近辺で製作され、同港から輸出されたものであり、椎野正兵衛商店がこれらに関わっている可能性が高い。なお、図5-1は、この衣装のパターンを起こしたものである。背中のパネルとブリーツ、後ろ身頃の形、3枚袖などに工夫が見られ、立体的で魅力的なフォルムが形成されており、見事な刺繍と相まって、近代化が急がれていた明治期の作品であることに驚かされる。

図2-2の写真⑥～⑧は同一のものであり、1890(明治23)年から1905(明治38)年頃の輸出用ドレッシング・ガウンである。アメリカから収集した。絹製で色は生成り、全体に刺し子がなされている。前身頃、袖口と襟およびポケットには同色の絹の撚糸で桜の刺繍がなされている。

図2-2の写真⑨はインターネット検索から見

出された紫色のガウンで、「IN THE MANNER OF LIBERTY'S. ANTIQUE」というレーベルが付いている、と説明されている。このレーベルの意味は、「リパティ様式で作られたアンティーク物」ということである。襟とポケットには桜の刺繍がなされ、全体には写真⑥と極めて似た形状で刺し子がなされている。襟の形は異なるが、ガウンの全体的な形も⑥と酷似している。

⑥のガウンには、表地として生成りの平絹が使用され、裏地には極めて薄く透明感のある絹が使用されている。表地と裏地の間には木綿のワタ状の厚布が入れられており、保温性を高めている。約2.5cm 間隔で縦に刺し子が施され、縫り糸を使用して、前身頃、袖口、衿に同色で桜が刺繍されている。ドレスの上に着用することができるように裾幅はかなり広くとっている。⑥は⑨と基本的には同一の形状をもっていることから、レーベルはないが、もし付けられていたとしたら「IN THE MANNER OF LIBERTY'S. ANTIQUE」と記されていたと思われる。さらに⑥と椎野正兵衛商店が輸出したことが確認されている刺し子のドレス・ガウンを比べると、全体的なデザインや前あきが釈迦結びになっていること、何よりも全面に施された刺し子の針目の大きさが約0.1cm、針目の間隔が約1.5cm、横との間隔は約2.5cm であることなどから、⑥は⑨の製作は同店でなされたことが推測できる。

以上から、当研究室が所蔵している刺し子のドレス・ガウンは、イギリスのリパティ百貨店からの注文を受けた椎野正兵衛商店(S.SHOBEY)が、送られてきた仕様書もしくは型紙に従って製作したリパティ様式のガウンの中の1枚であると推測できる。このように考えると、当時、ロンドンのリパティ百貨店のショーウィンドに日本製のドレス・ガウンが展示されていたことや、同店のクリスマス・ギフト商品として同様のガウンが宣伝されたことの説明がつく。

(3) 千總製のイヴニング・コート(マンダリン・コート)

図3-1は、アメリカから入手した千總製(西村總左衛門)のイヴニング・コートである。写真④で示したように、「S.NISHIMURA」のレーベルが襟首についている。薄茶色の上質の絹地に、刺繍が大胆かつ精緻に施されている。写真②のように、後身頃の襟首から背中にかけて、仰々しいほど大きく鳳凰が刺繍されている。そしてこの鳥が住むという桐林を暗示した桐の葉と唐草の刺繍が中国趣味に込められている、逸品である。

背面の刺繍の鳳凰は、岸竹堂が飯田高島屋から依頼されて描いた「旭陽桐花鳳凰図下絵」に極めて似てい

る。当時、京都画壇の中心にいた岸は、千總からの依頼も受けて友禅や刺繍の下絵を描いていたと言われていたので、千總製のイヴニング・コートに「旭陽桐花鳳凰図」に似た刺繍がなされても不思議はない。

千總の十二代、西村總左衛門は、身にまとうという実用面だけでなく美術鑑賞品としての付加価値を付けてキモノを欧米に送り出したと言われていたが、このコートはまさにそのことを実感することのできる衣装であり、レーベルの文字から、この店が東京に支店をもつ1903年以前の作品であると考えられる。

(4) 飯田高島屋製のイヴニング・コート(マンダリン・コート)

図3-2は、「S.IIDA TAKASHIMAYA KYOTO TOKYO & YOKOHAMA」というレーベルが襟首についているイヴニング・コートである。1900年頃の飯田高島屋の輸出品であり、アメリカから入手した。茶色の薄手シルクのイヴニング・コートで、マンダリン・コート風にデザインされており、丸首、キモノ袖、両横につなぎ布と長いスリットが入っていて、後ろ腰にボリュームがあるドレスの上に着用できるように工夫されている。中国服にも見えるこのコートには、全面に、芥子の花が白糸の絹糸で、葉が金茶の絹糸で刺繍されており、豪華な衣装である。

図3-4および3-5のイヴニング・コートは、レーベルがつけられていないので、飯田高島屋のものとは断定できないが、基本的なデザインや前あきの釈迦結びの数、つなぎ布やスリットが酷似しているため、おそらく同店の製品であろう。図3-4のコートは紺色の光沢のある絹地全体に、白、淡いグレーとダーク・グレーの絹糸で桜が肉入刺繍されている。図3-5のガウンは、光沢のある白鼠色の絹地に淡い色合いの絹糸で菊や蝶の刺繍が施されたものである。菊は肉入刺繍であるが蝶はそうではない。この2つのイヴニング・コートは刺繍によって立体感をもち、東洋情緒が醸し出されている。図3-4のコートはイギリスから、図3-5のコートはアメリカから入手したものである。

(5) カナダに輸出されたイヴニング・コートとロシアに輸出されたキモノ風室内着

図3-3は、白鼠色の絹地に薔薇が大きく刺繍されたイヴニング・コートである。先述の千總製や飯田高島屋製の高級な素材で入念に作り上げられたコートと比べると、生地、刺繍ともいささか質が落ちて、庶民的な感じがする。襟首に「Oriental Importing Co. Importers Silk Goods 510 Cormorant Victoria BC」とレーベルが付けられていることから、カナダのブリティッシュ・コロニア州ビクトリアにあった「Oriental Import 社」が取り扱った商品であったこと



図1 幕末の刺繍小袖と打掛



図2-1 ピエモンテーズ風プリーツをもつドレスング・ガウン

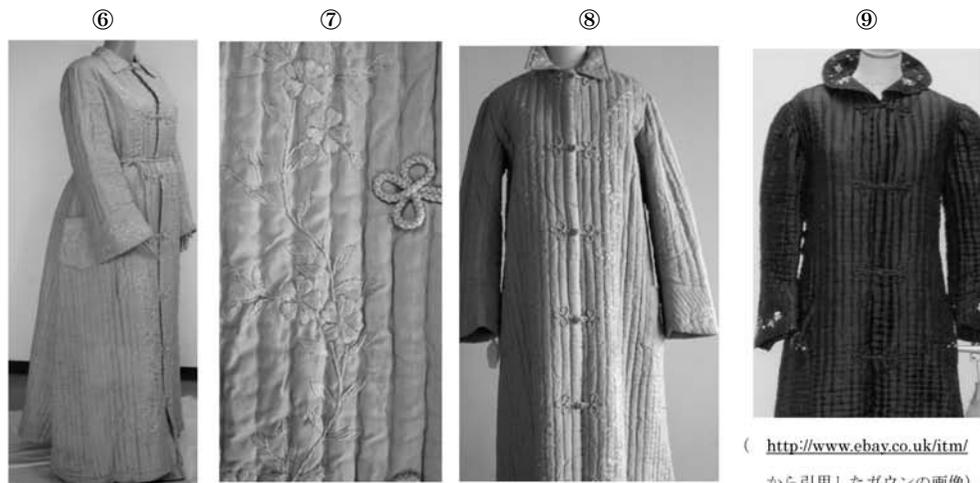


図2-2 刺し子が全面に施されたドレスング・ガウン

①

②(上),③(中),④(下)



図3-1 千總製のイヴニング・コート

⑧

⑨(上)と⑩(下)



図3-3 カナダに輸出されたイヴニング・コート

⑤

⑥(上)と⑦(下)



図3-2 飯田高島屋製のイヴニング・コート

⑪

⑫(上)と⑬(下)



図3-4 桜の花が刺繍されたイヴニング・コート



図3-5 菊と蝶が刺繍されたイヴニング・コート



図3-6 ロシアに輸出されたキモノ風室内着





図4-1 キクの刺繍のキモノ風室内着



図4-2 薔薇, 菊, 桜の刺繍のキモノ風室内着



図4-3 躑躅とシダの刺繍のキモノ風室内着

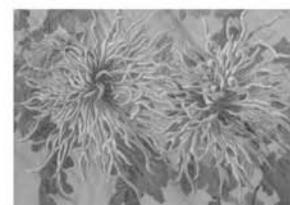


図4-4 大輪の菊の刺繍のキモノ風室内着

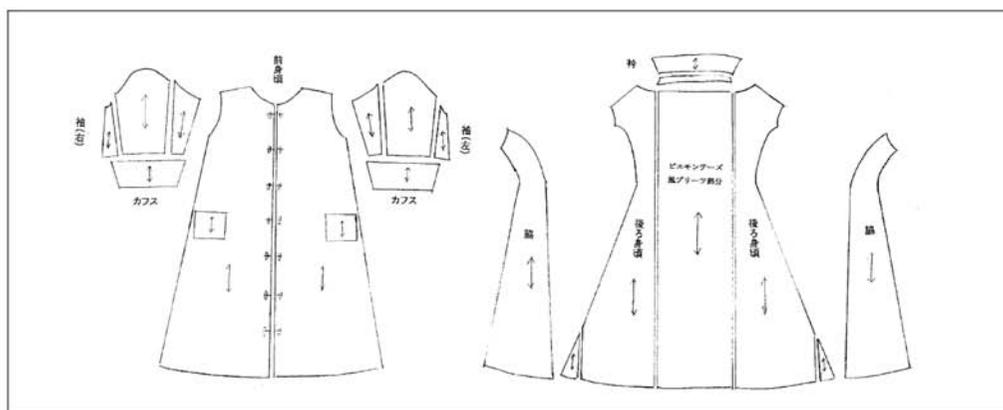


図5-1 ピエモンテーズ風プリーツをもつ Dressing・ガウンのパターン

が分かる。

また図3-6は、ロシア向のキモノ風室内着であり、襟首にはロシア語で「熊沢・横浜」と書かれたレーベルが付いている。明治時代、横浜でロシアとの取引を盛んに行っていた熊沢商店が取り扱った商品であったようである。鳳凰をモチーフとした刺繍が図の3-1の千總製のイヴニング・コートのと似ていること、また袖口に大きな飾り房が付いており、千總製のキモノ風室内着もそうであることから、熊沢商店が輸出した千總製の室内着であったことが推測される。

明治期に日本で製作されたイヴニング・コートやキモノ風室内着が英米に輸出されたことはよく知られているが、今回の研究で、少数例ではあるがカナダやロシアにまで輸出されていたことが分かり、刺繍の付いた絹のキモノの力に改めて驚嘆する次第である。

(6) その他のキモノ風室内着

図4-1は、緑青色地のキモノ風室内着を斜め後ろから写したものである。全体に桃、白、緑、茶色の絹糸で、肉入りや平縫いを使用した刺繍が施されているが、特に背面には立体的に見える大きな菊の花が付けられている。この室内着にはレーベルがついていないが、上質の光沢のある絹地、丁寧な刺繍、袖口から下に向けてつけられた飾り房という特徴をもつことから、飯田高島屋からの輸出品である可能性がきわめて高い。飯田高島屋が1904~1908年に輸出していた室内着に似ているが、時代的にはそれより10年以上後のもののだと思われる。ドレスの上に着用することができるように、後ろ身ごろと前身頃の間に羽織のように台形の裾を入れて、本来の着物よりも裾が広がるように工夫している。アメリカから入手した。

その他、図4-2、図4-3、図4-4のキモノ風室内着は、薔薇、菊、桜などの花を肉入刺繍したものである。各衣装に施された刺繍から、明治期に欧米を魅了したキモノの力が実は大部分は日本刺繍の力ともいべきものであったことを再認識したい。

Ⅲ. 明治期の絹織物の厚み測定

明治期の輸出用のイヴニング・コートやキモノ風室内着に使用された絹地については、表地、裏地ともに国内用の生地と比べると薄手であったと言われていた。実物衣装を観察してみると、とりわけ薄さが極まっているのは裏地であったことが理解できる。

日本製のコートや室内着が盛んに輸出されていた時期である1903(明治36)年、大阪において第五回内国勲業博覧会が開催された。これまでの勲業博覧会がそうであったように、この博覧会においても多種多様

な織物が展示された。閉会後には、出展された織物について、表面に実物の裂、2枚を添付し、裏面にその裂を解説したシートが作成され、最終的には1セット252葉、504点の染織裂標本シートを集積した「染織鑑」という実物布添付資料が発行された。

「染織鑑」から、例えば古くから名高い福島県川俣地方産出の輸出用絹地は、薄さと品質の良さを兼ねていた織物であったことを知ることができる。それではこの地方の輸出用の絹地はどれくらいの厚さを有していたのだろうか。『染織鑑』所収の川俣羽二重標本(福島県工業試験場)を尾崎製作所のアップライトゲージ「PEACOCK No25」で計測したところ、「0.055mm」であった。さらに別の川俣羽二重標本(川俣町の香野三左衛門)を測定したところ、「0.065mm」であった。比較のため、近年、同じ川俣町で「齋栄織物株式会社」によって開発された、世界一薄い「妖精の羽」と呼ばれる絹織物の厚さを測定したところ、「0.045mm」であった。齋栄織物の織布技術には敬服するばかりである。

それでは、明治期の輸出衣装の絹地はどの程度の値を示すのであろうか。図2-1のビエモンテーズ風ブリーツをもつドレス・ガウンの場合、表地は「0.207mm」で、裏地は「0.089mm」であった。図2-2の刺し子のドレス・ガウンの表地は「0.183mm」、裏地は「0.054mm」であった。図4-1のキモノ風室内着の表地は「0.096mm」で、裏地は「0.050mm」であった。図4-2のキモノ風室内着の表地は「0.124mm」で、裏地は「0.044mm」であった。以上から、図4-2のガウンの裏地は「妖精の羽」と同程度に薄いものであったことが分かり、明治期の織物技術の高さに驚かされたのである。

Ⅳ. 日本染織文化への理解を促す教材の作成

表1は、「日本人は何を着てきたか」について、歴史の流れに沿って理解できるように仕組んだ、質問表である。回答者はパックに入った様々な小裂から、各質問の答えに当たるものを探し出さねばならない。中には、これまでに目にしたこともないような古い布片が入っていたりするので、布を楽しみながら回答を考えることができる。20問全部に回答させるのは時間的に難しいと思われるので、適宜、問題を選択して短時間用の質問紙を作成する必要がある。

図5-1と図5-2の教材は簡単に作成できる。

開発した教材について簡単に説明をすると、まず図5-1の①は、長崎巖著『在外日本染織集成』を解体し、一枚ずつラミネート加工をしたものである。日本



図5-1 開発した教材 (1)

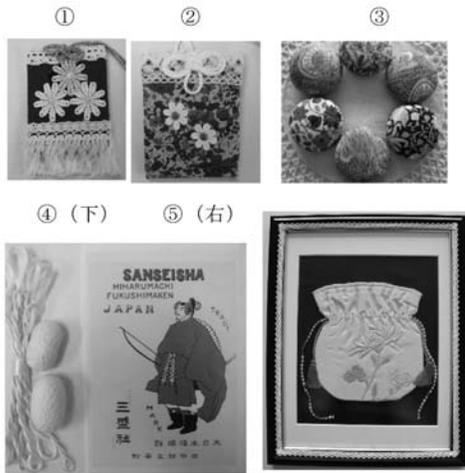


図5-2 開発した教材 (2)

の価値ある美しい着物がアメリカのどこの美術館に収蔵されているのか、一目瞭然となる教材である。

同②はグラスゴー美術館が発行している、1912-1913年のパリ・ファッションのぬり絵集⁷⁾の中の一枚である。当時のパリ・ファッションに着物の影響があったことが、ぬり絵をすることによって実感できる。

図5-2の①と②は、二重叶え結びをもつお守りである。①は絹で、②はリバティ・プリント(木綿)で製作した。③は円形のマグネットをリバティ布でくるんだ実用的なものである。①～③はいずれも高度な技能を必要とせず、短時間で製作できるので、針使いが苦手な生徒も興味をもって取り組むと思われる。

図5-2の2つは、教師が生徒に見せる教材として製作すべきものである。④は、アメリカの「Dover Publication Inc.」がCD-ROMとして発行している、日本の生糸輸出会社のトレード・マークである。例示したのは福島県の三春町の三盛社のマークであるが、他に全国200社のトレード・マークが納められている。日本がいかにかシルクの国であったか、また外国に輸出

するシルクにどのようなイメージをもたせようと考えたのか窺い知れる教材である。⑤は、図4-2の着物風室内着の帯の先端を利用して製作した押し絵である。菊の刺繍が施されている部分を使用して、ビクトリア期に高貴な女性から好まれた刺繍付きの日本製巾着を表現した。

以上、「染織日本の伝統と文化」を中心に据えた学習を支援する実際の教材を開発したが、先生方にはこれらを参考にして、一層高度でかつ興味深い関連教材を開発していただけたらと思う。

おわりに

先頃、世界遺産に登録された富岡製糸場や、近年、全国の美術館で盛んに開催されている明治の超絶技巧展などを通して、江戸から明治へと時代の大変革期に生きた、ものをつくる人々のゆるぎない精神と驚嘆すべき技量が我々に伝えられている。この時期に、近代化に貢献するという大いなる役割を担って欧米に輸出された着物風衣装の実物を手にしたとき、それらから様々なメッセージが発信されていることに気づく。「染織日本の伝統と文化」に関する授業構築は、このような衣装が発するメッセージを真摯に受け止めて、身のうちに貯めて反芻し、その結果、最も大切だと確信したことを生徒に興味深く、理解しやすく伝えるということがベースとなると思われる。本稿がそのような授業構築の一助となれば幸いである。

【注】

- 1) 高橋美与子、柴静子、日浦美智代、一ノ瀬孝恵他「海を渡ったキモノから『染織の日本』を再発見する衣生活学習の開発」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』42号、pp.29-38、2014。
- 2) 柴静子「『染織の日本』の発見を主題とした衣生活学習を支援する調査と内外資料の収集」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部』pp.311-320、2013。
- 3) 図録『モードのジャポニスム 東京展』、京都服飾文化研究財団、pp.70,71,98,99、1996。
- 4) 長崎巖『在外日本染織集成』、小学館、p.22、1995。
- 5) 浦野理一『染繡小袖』、文化出版局、pp.38-45、1975。
- 6) 『V&A Pattern kimono』、V&A Publishing、pp.67-68、2010。
- 7) 『Paris Fashion Designs 1912-1913 Coloring Book』 Glasgow Museums、p.1、2012。